

Re: ナツキ・スバルが女だったら

ラノベキャラの女装ネタ好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナツミ・シユバルツって可愛くない？

目次

プロローグ	1
第一章1 『男心は分からない』	5
第一章2 『お巡りさん』	8
第一章3 『2週目』	17
第一章4 『分からないか？俺もわからない』	23
第二章1 『目覚め』	25
第二章2 『お婿にいけない』	28
第二章3 『リングガ飴』	33
第二章4 『放蕩貴族』	37
第二章5 『見捨てられたモノ』	39
第二章6 『再会の精霊使い』	42
第二章7 『王選』	45

プロローグ

『あの子のテンション可笑しくねww』

『分かる。情緒不安定というか：わざとらしいよね！』

『ウチらの事、実はバカにしてんじゃね？』

高校の春。ついに来てしまったというか、意外と持ったほうだと称えるべきか。私は学校での居場所を失い、それほど長くない期間を経て『引きこもり』へとジョブチェンジした。

プロローグ 【ナツキ・ナツミ】

月曜の午前八時。ホウホウホホウと鳩の鳴き始める穏やかな早朝。

「おっはよう！我が愛しきプリンセス！」

「——眩しッ!？」

安らかな寝顔を浮かべる絶世の美女こと現役女子高生菜月奈津美の目覚めは、ゲラゲラと笑いながらカーテンを開ける上裸の大男によって起こされる。

「年頃の娘の部屋にノックも無しに入ったばかりか、朝っぱらから半裸を見せられる。どうにかしてこのクソ親父をブタ箱にぶち込めなイものか——と言いたげな顔だな！」

「……別にそこまでは思ってたねえし。分かってんならノックぐらいしろやおおん?。」

ナツミは無駄に伸びてしまった髪をかきあげながら、自慢の筋肉を見せつけるようにサイドチェストを決める親父、菜月賢一なつきけんいちを母親譲りの目つきの悪さで睨み付けた。

「何だ何だ、ちよつと前までお父さんと一緒じゃないと眠れないなんて可愛らしいこと言っていたのに、ついに反抗期か！いつか来るとは思っていたが、もしかしてこのまま「お母さん、お父さんと洗濯物分

「御馳走様」

「お粗末さん！じゃあナツミ。ぱぱっと洗い物して腹ごなしに学校まで競争すつか！」

「あー、今日は重い日だからキツイかな」

「……マジか。それは大変だな」

流れるように登校を促す親父に、適当な嘘鉄板ネタを言つて部屋へと戻る。

流石の賢一でも年頃の娘にそれが嘘かどうか証明しろ等とは言えない為、まさに必殺技であつた。

「ふう」

ベットに寝転がったナツミはなにげ無しにカレンダーを見た。

三月のページ。

気づけば学校に行かなくなつてからもう五ヶ月が経っていた。

「どっかに、都合のいい男転がってねえかな」

もはや社会復帰は絶望的だとすら感じているナツミは、女性としての権利を最大限活用し、いい男を捕まえて家庭に入れればと考えていた。

子供は好きだし、これでも中の上ぐらいの顔面スペックはあると自負している。本気でオシヤレしたら上の下ぐらいは狙えるだろうし、将来何かになりたいという特別な夢もない。

強いていえば、こんな自分に嫌味一つ言わず育ててくれた両親に恩返ししたり、なるべく早く孫を抱かせてやりたいというぐらい。…別に働かなくても叶えられそうなものばかりだ。

チクタク、チクタクと時計の針ばかりが進む停滞した空間。

十二時半になって、徐に起き上がるとナツミは財布と携帯をポケットに詰めた。

「……コンビニでも行くか」

引きこもりだつて、たまには日の光を浴びたくなる。

「あら、出掛けるの？」

「ちよつとコンビニまで」

「ならお母さん、シュークリーム食べたいから買ってきて」

「ああ、分かったよ。セブンの特別美味しいの買ってくるわ」

昼食の準備をしていた母に呼び止められて一瞬ドキッとしたが、どこに行くかを伝えれば安心したような顔をしてデザートを要求してきた。

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」

第一章1 『男心は分からない』

コンビニ袋を片手に横断歩道で信号待ちをしていたら、天候が曇りから快晴に変わって別の場所にいた。

「……………は？」

巨大なトカゲのようなものが荷物車を引いて、二足歩行の人外が当たり前のように街を闊歩している。日本どころか世界中探してもどこにもないであろう幻想的な空間。

今、自分はそこにいる。

正直、自分でも何を言ってるか分からないし、頭がおかしくなってしまうのではないかと脂汗が止まらない。

「もしかして異世界召喚系……?」

この手の青臭いジャンル嫌いなんだけど。
内心ナツミは呟いた。

第一章1 『男心は分からない』

路地裏に腰掛け、取りあえずスナック菓子を頬張るナツミ。

「異世界召喚。異世界召喚ねえ〜」

突然こんな事態になってしまった訳だが、不味いことにナツミにはその手の知識が臍気であった。

高校生活では日々移り変わる女子高生の会話の波についていくのが必死だったし、好みでもないジャンルをチェックする暇なんてなかった。

「おい、お前」

なら約半年に及ぶ引きこもり生活で何をしていたかと言えば、もっぱら恋愛系の携帯小説を読み漁る毎日。たまにファッション誌を見ては一コーデイナートの総額に絶句し、古着屋を何軒も〴〵はしご〴〵してそれっぽいのを集めるのに時間を要した。

「それっぽいのだと、ワタルしか知らないな」

「聞いてんのか、テメエ」

異世界召喚と言われれば、某異世界ロボットアニメしか知らないが、引きこもりの割に外に出る機会は多かった方だと思う。

最初の頃は気まづかったが、「女の子は色々あるんです」と誤魔化しが聞いたのが良かった。良くも悪くも女性性は家庭に入るものだという風潮の残るガラケー全盛期の現代社会。

これで男なら学校に行かずに何をしているのだと白い目で見られることもあったかもしれないが、年の離れた相手になるとコミュ力が上昇する定評のあるナツミは、ご近所さんからとやかく噂されることはなかった。

「ぶち殺すぞー！」

「ああん？」

ふと甲高い声に顔を上げれば、チビ、ひよろガリ、デブがナツミの前に立って腕を組んでいた。

「ふん、今頃気づくとはとんだ間抜けだぜ」

「女がこんな路地裏にいたらどうなるか、きっちり教えてやらねえといけねえな？」

絵に書いたようなチンピラである。おいおい召喚早々にこれかよと、異世界の治安事情にウンザリと肩を落とした。

「へへ、よく見たら上玉じゃねえか。これはそつちの楽しみも……」

「あー、タイプじゃないんでごめんなさい」

「……え」

つい言葉に出てしまい、にじりよるデブは凄く悲しそうな顔をした。

「やっぱり、顔かな……」

「大丈夫だ。そこそこ、そこそこイケメンだぞ！」

「てめえ！なんて事を言いやがる！こいつは凶体の割に繊細なんだ！」

ふて腐れてしまったデブを励ます、チビとひよろガリ。
実は見た目ほど悪いやつらではないのかもしれない。
何だかな……と、頭を掻きつつナツミは今のうちに逃げ出そうと踵
を返す。

「——そこまです、悪党」

そのナツミの前に銀髪のハーフェルフが立ち塞がった。

第一章2 『お巡りさん』

「そこまでよ、悪党」

凜とした雰囲気を纏う少女。

背は自分よりも少し低いのだろうか、少し尖った耳に銀色の毛並み。まるで妖精のように浮世離れした美しさだと見惚れたのも数秒、ナツミは彼女の横を抜けて街道へと出た。

「あ、え!？」

恐らく彼女は这个世界で言う警察のような役回りの人間なのだろう。

普通こんな女の子一人で男三人に立ち向かえる訳ないが、当たり前のように子供が壁をピヨンピヨンと忍者渡りする世界だ。

これだけ堂々としているのだから、魔法とか超能力とか、普通の人より筋肉繊維が多かったりするに違いない。

運動が苦手なナツミが残っても、むしろ邪魔になるだけだ。

「後は任せませ、お巡りさん」

「おまわり……?」

貴方、私のあれを盗んだ子の仲間じゃないの?」

困惑するように此方に問いかける少女。どういう推理で自分がアイツらの仲間だと導き出したかは少し興味があるが、どうやら——チビ、ひよろがり、デブの三人組は婦女暴行（未遂）ばかりか、窃盗の余罪を抱えていたらしい。

「生憎、心当たりはないな」

「嘘……ではないようね。ごめんなさい疑ったりして」

「いいよ、いいよ。間違いぐらい誰にでもある」

頭を下げる少女に苦笑して、ナツミは安全に休める場所を目指し歩き出した。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「……今日はここを宿にするか」

大通りから大分歩いてスラム街のような奥地までたどり着いてし

まったナツミ。むしろ先ほどの場所よりも治安の悪そうなここだが、路傍の隅にあるこんな廃屋なら人目に付くこともないだろう。

「悪いが、そこはアタシの家だぜ姉ちゃん」

ナツミの腰にポスリと硬い何かが押し付けられる感覚。

驚きにナツミが振り替えれば、鞆に収めたナイフを突き出してニヤリと笑う少女がいた。

金髪と赤いマフラーが特徴的な、自身の胸辺りまでしか背丈のない彼女。

ナツミは、この世界ではこんな小さい子が廃屋で生活せねばならんほど、世知辛い世の中なのかと今後を憂いる一方で、何処かで見たとような既視感から「あつ」と指を弾く。

(こいつ、さつき壁ピョンピョンしてたヤツだ)

それはナツミが三人組に出会わせるよりも数秒前のこと。スナック菓子を頬張るナツミの上を忍者顔負けのパルクールで通過した少女がいた。あの時は流石異世界としか思わなかったが、意外と世界って狭いものだと感傷的な気持ちになる。

「……これあげるから今晚だけ泊めてくんない？」

もう大分日も傾き初めているし、これから宿を探すのは骨が折れる。そこで虎の子であるシュークリームをナツミは差し出した。

それでなんやかあつて、金髪の少女——フェルトと仲良くなった。やはりコンビニスイーツは至高！という話は置いて…。

この家で二人は手狭だということで、彼女の信頼するロム爺の店で暫く厄介になることになった。

「本当にいいのか？」

今夜さえ乗り越えれば自分で何とかやるつもりだけど」

「大丈夫だって。ロム爺なら新入りだろうと、ここらの人間を邪険にしねえよ」

それにアタシの紹介だからな。フェルトは偉そうに鼻を鳴らす。

何なら働き口も紹介してもらえる勢いだ。フェルトは盗品で生計を立てているそうなので、ろくな職場ではなさそうだが——この際

だ。贅沢は言ってもらえない。

「大ネズミに」

「毒」

「スケルトンに」

「落とし穴」

「我らが貴きドラゴン様に」

「クソつたれ」

異世界にもネズミっているんだな。

合言葉を交わして出てきた褐色の老人に出迎えられて、そんな事をボンヤリと思う。

「何じゃ、この貴族の娘が野盗にでも育てられたような悪人面の嬢ちゃん的面倒を儂が見ればいいのか？」

「誰が悪人面だ！」

「そうだな、出来ればロム爺の所で仕事も紹介してくれねえか。この姉ちゃん、自分の生まれも、どうして王都にいたのかも分からないらしいし」

「……野盗じゃなくて猿に育てられたんか？」

まあ顔は良いし、口うるさい上客の接待でも仕込めば使えそうだから儂は構わんが」

猿に育てられたような女という評価は気に食わないが、どうやら就職先の待遇は良さそうだとなツミはほっと胸を撫で下ろした。

「ありがとよ、ロム爺さん。これから宜しく頼むわ」

「ロム爺で構わん」

「早速だけど、この後上客の依頼が待ってんだ。姉ちゃんにはソイツの相手を任せてもいいか？」

「おう任せとけ」

気難しい魚屋の親父から三割まで鮭を仕入れるナツミ様の腕前を見せてやるよ！

「いらっしやッ」

「——貴方、あの時の」

第一章2 『お巡りさん』

ナツミが上客だと思つて出迎えたのは、よりにもよつてお巡りさんだった。

「ま、待てー！これには浅くも広くない訳がッ！」

この世界で生き残る手前、断腸の思いで裏稼業に手を伸ばすのもやむ無しと手を打ったが、まさか開始早々お縄につく事態になるとは想定もしていなかった。

「私からの要求はひとつ。——徽章を返して。他はいいけど、あれはダメ。大切なものなの」

交渉の余地はないか。鋭い双眸で殺気すら感じさせる圧を放つ彼女は宙に氷の塊を浮かべて自分達に牽制する。

「……これは魔法か？」

「魔法と言えば魔法だが、こいつは不味い。フェルト厄介な仕事を受けたもんだの」

「ちつ、どつかの誰かがチクリやがったか」

（は!?あの時の窃盗つて、もしかしてアイツらじゃなくてお前の事だったの!?!）

盗品で生計を立てるとは聞かされていたが、まさかお巡りさんから盗みを働くとは……フェルトの野郎。怖いもの知らずにも程がある。

「悪いな姉ちゃん。初仕事でこんな損な役回りとはお互いについてねえ」

「…ちなみに、盗んだものを大人しく返すという選択肢は？」

「どのみち、衛兵に突きだされるのがオチだぜ。」

報酬からして結構ヤバい橋を渡った自覚があったからな、下手したら三人仲良く斬首の刑……」

「ヘルプ、ロム爺！」

ナツミは藁にもすがる思いでフィジカル的に一番強そうなロム爺を頼るが、

「無理じゃな。ただの魔法使いなら遅れを取らんが、エルフで精霊使

いとなると儂でも手があまる」

「……………」

ロム爺がエルフと言った瞬間。お巡りさんが悲しそうに眉を歪めたのをナツミは見逃さなかった。

だけど、何故彼女がそんな顔をしたかを思考するのも許さず、ユラリとした影が彼女の背後で舞う。

「——あ」

唐突に

グサリと、彼女の腹部からナイフが突き出た。

「「ツウ!?!」」

目を見開いて驚く三人。

「銀髪のエルフ……いえ、ハーフエルフね。

こんなに珍しい腸はらわたは見たことがないわ」

長身の女。血に濡れたククリナイフを片手に引っ提げて恍惚とした笑みを浮かべる黒髪の女が、倒れ伏す彼女の背後から現れた。

(死んだ、殺したのか。こいつが、いつ、今……さつき?)

彼女の腸からドクドクと流れ出る血。それに混じる肉片……目玉

「うげ、うえええええ」

光のない彼女の瞳と視線が重なった。

ナツミはたまらず胃の中のものを吐き出してしまう。

「あらあら。お嬢さんには少し刺激が強すぎてしまったかしら?」

女が自分を見る。ナツミは次は自分が狙われるのではないかと、悲鳴を漏らしながら千鳥足でロム爺とフェルトの所まで下がった。

「どういう事だ!」

フェルトが吠える。

「悪いけど、関係者は皆殺しにする命令なの」

「クソっ! 異常者め!」

フェルトの叫びと共に棍棒を振りかぶったロム爺が女へと走る。ドシヤリ、グシヤリと罵声を浴びせながらロム爺が振り回す棍棒は周囲を破壊して回るが、女はタップダンスでも踊るみたいに緩やかな動きでそれをかわしていく。

「私、巨人族と戦うのは初めてなの」

段々と喋る余裕もなくなっていくロム爺に対して女の落ち着いた声色から、ナツミは両者の実力差を悟った。

「ふ、フェルト!」

「大丈夫だ。ロム爺が負ける筈がねえ」

このままではロム爺まで殺されてしまうと焦るナツミを、フェルトは不自然に落ち着いた様子で宥めた。

人間取り乱すと一週回って落ち着くというが、今のフェルトがまさにそれだろう。どうしてあれを見てロム爺が勝てると思っているのか——それとも負けて欲しくないという想いが強いあまり、現実が見えていないだけなのか。

『ロム爺はさ、私唯一の家族なんだ』

道すがら、フェルトはそんな事を言っていた。

照れくさそうで何処か誇らしげに。

……そこでナツミは、フェルトがこの中で一番年少者であることを思いだし、酸っぱい唾液を飲み込んで立ち上がる。

(今、自分に何ができる)

このままいけばロム爺は死ぬ。その次は自分達も殺されるだろう。

三人の中で一番強そうなロム爺でこれだ。非力でそれほど頭のよくないナツキ・ナツミに何ができるのかと自問自答した。

「うりよあああ!!!」

まず、近接戦は論外だ。ナツミじゃ肉壁になれるかも怪しい。

ロム爺の盗品蔵には武器だつて置いてある。

剣に槍。あれらを投げるだけでもサポートにならないか。

……ダメだ。どっかの黄金王みたいに一齐に打ち出せるならまだしも、ナツミの筋力なら持ち運ぶのも難しい。無理をして一本一本投げても焼け石に水だろう。

——ならば、軽くて一本でもいいものが必要。

そんなナツミの目に映ったのは酒瓶であった。

「食らえっ！」

ロム爺が大降りに振って、女がロム爺の腕を切り落とそうとする瞬間だった。

女の頭に吸い込まれるように投擲された酒瓶は当たる寸前で破壊される。どうやらククリナイフをもう一本隠し持っていたらしい。

「ちっ」

だが、酒が目に入って滲みたのか顔を背ける女。

「ナイスサポートじゃ嬢ちゃん！」

その隙を逃さずロム爺の棍棒が女の懐に入って、そのまま壁を突き破って外まで弾け飛んだ。

「やったか？」

並の人間なら即死。よくて長期入院確定の重傷だろう。

それでも身体能力からして自分の世界と大きく乖離する異世界。

ナツミは油断なく壁の方を見つめ「ぬう!？」自身の腹、それにうっすらと浮かぶ赤い一線に片膝をつくロム爺に舌を打った。

「ロム爺！」

「ぜえぜえ…心配するな、かすり傷じゃ」

そう強がるものの、ロム爺の顔色は悪い。

「——あら、常人なら臍物を切り裂くほど深く抉っただけけれど、巨人族の臍物は随分と小さいのね」

煤汚れた女が何事もなかったかのように現れる。

「その貴方。さっきの不意打ちは中々良かったわよ」

「は、そんなに褒めてくれるのならそのまま帰ってくれてもいいんですけど。今ならなんとフェルトが盗んだやつもサービスしてやるよ」

「気前のいい店は好きよ。こんな事にならなければ私、この店の常連になっただけかも」

初めから殺すつもりだったくせに随分な物言いだ。

思わず乾いた笑みが漏れてしまう。

「……………フェルト。お前だけでも逃げろ」

「はあ!?ふざけんな、私だけケツまくって逃げろってのか!？」

「ばか最後まで聞け。まず私とロム爺で何とか隙を作る。」

その間にお前が逃げて次は私。その次にロム爺っていう完璧な作戦だ。そう思うだろロム爺！」

「猿のガキだと言ったのは取り消してやるぞ嬢ちゃん。口出ししようもない完璧な作戦じゃわい！」

決して絶望して自棄やけになった訳じゃない。いや、若干自棄やけになつているかもしれない。

戦うのは怖いし、死ぬのは超怖い。けど、ここで一秒でも長く生きる為に足掻くより、若いやつを生かす為に時間を稼ぐのが建設的だと自分は思う。それにフェルトが超強力な助っ人を呼んでくれるって夢見がちな可能性もある。

「姉ちゃんもロム爺も……クソっ！直ぐに助けを呼んでやるから持ちこたえろよ！」

おう。窓から飛び出したフェルトはあつという間に遠退いていく。この分なら追い付かれることもないだろう。

「逃がさない」

「んなこと、私達がさせるかよー！」うおりああああ!!!」

ナツミ、ロム爺は雄叫びを上げた。

それから、ナツミとロム爺は格上を相手に思いの外長くやりあった。

だけどロム爺が先に限界を迎えて、ナツミは不意をつかれた一撃で

パツクリと腹を裂かれる。

「あ、がっ!？」

痛い痛い痛い痛い!!!!

踞るナツミを馬乗りになつて両手両足を地面に縫い付け、腹の皮をつまみ上げる女。

「やっぱり……貴方の腸はとつても綺麗」

同性として嫉妬したくなるほど綺麗な微笑み。

ナツミは頭が焼ききれそうな激痛なのに、意識は朦朧としていて、これが死ぬことなのかと理解する。

「ゆっくり、ジワジワと冷たくなっていく」

ゆっくり、ジワジワと……冷たくなっていく。

「ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり」

ゆっくり……ゆっくり、ゆっ………くり

「ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり」

ゆ、……くり、ゆっく……り……ゆ

ナツキ・ナツミは命を落とした。

第一章3 『2週目』

「——うめえええ!!!!何だこのフワフワの菓子は?!」

暗転したナツミの視界が一変。元は母に頼まれて買ってきたセブンの特別美味しいシュークリームを頬張る、破笑したフェルトの笑顔で埋め尽くされた。

下手をすれば今後一生ありつけないそれだが、これ程美味しそうに食べてもらえるなら後悔はないと、前と同じことを思考する。

「……成る程。異世界召喚と言えば定番ちやつ定番だよな」

ファンタジー物の主人公が死んだのなら、教会で蘇生するかセーブポイントまで巻き戻る。どうやらナツミは後者だったらしい。

(だけどまあ……教会パターンじゃなくて良かったかもな。金銭を要求されたら返しきれぬ自信がねえ)

死んだ人間を甦らす事が何れだけ凄いことかなんて推し量れる物ではない。廃屋の外に腰掛けたナツミは、異世界にきて借金地獄など笑い話にもならないなと肩をすくめた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「なあ、フェルト。お前に依頼したやつって黒髪に黒い服を着た女か？」

「おう。何だ姉ちゃんの知り合いだったか？」

「……別に知り合いつてほどじゃねえけど、同じ髪色だと色々あるんだよ」

「ふくん」

前回と同じように盗品蔵に向かう最中、ナツミはフェルトに死に戻る前の記憶がないことや、ここが別の世界線でないことなどを軽く確認してみた。

フェルトはナツミとついさつき会ったばかりで、今のところ前回の記憶と相違はないが、前回のことを話そうとすれば心臓を締め付けられるような激痛が襲った。

あの女と会う前にフェルトとロム爺を連れて盗品蔵から逃げた

かったが、人生をやり直すという破格の力の代償は思うように事を運ばせてくれないらしい。

(やっぱ、警察……この世界で衛兵の力を頼れねえのが痛いな。あの女から逃げおかせても、その後斬首されるんじゃない意味がない)

「そう言えば、姉ちゃんは」

「……ん？」

「姉ちゃんは夢とかあるか？」

「強いて言えば贅沢はしたいな。良いのも食ってふかふかのベッドで毎日おやすみしたい」

「へえ……アタシと同じだ」

「なら、私が金持ちになったらお前とロム爺と一緒に暮らすか？」

「そいつはいいな。まあ姉ちゃんには無理だと思うから逆にアタシが金持ちになったら召し使いとして雇ってやるよ」

「給料弾めよ？」

「勿論！」

そう言えば、自分が死んだ後のフェルトはどうなったのだろうか。死に戻りした今では関係ない話かもしれないが、きつとフェルトが盗品蔵に戻った時、死んだ私達を見て悲しんだだろう。会って数時間の自分は兎も角、ロム爺は育ての親みたいな存在だ。

……そりあ辛いな。

そして自分が何もしなければまた同じことが起きる。

(折角だ。折角、私みたいなズブでノロマな女が死に戻りなんていうチート能力に目覚めたのに、自分だけ助かるうなんて目覚めの悪い) 死んだ痛みと恐怖はしかと魂に刻み込まれているが、別にこれから死に行くわけじゃない。

一度関わったら、最後まで関わり通すのが菜月家の家訓。

「おしや、行くか！」

第一章3『2週目』

「私からの要求はひとつ。——徽章を返して。他はいいけど、あれはダメ。大切なものなの」

ロム爺の盗品蔵で働く事を確約して数秒。

銀髪の彼女が現れる。

「まあまあ、そんな殺気だたないで。取り敢えず扉から離れたらどうですかお嬢さん。温かいミルクもありますし、そんな所に立っているのと、悪い魔女に背中から刺されるかもしれないかもしれませんよ」

「——姉ちゃん。そいつは客じゃねえ」

まるで厭らしい奴隷商のように胡麻すりするナツミにフェルトはバツの悪そうな顔をして忠告する。

だが、二週目であるナツミがそんなこと知らない訳がない。

彼女も危険といえれば危険だが、ロム爺が太鼓判を推す強者であるし、不意打ちされてリタイアするより、せめて私達の為に役に立ってから死ね——というゲスな考えからでなく、単純に自身の精神衛生上を思つてのこと。

一度目は気にする余裕がなかったが、意識してしまうと死体がある中で戦うというのは気が滅入ってしまう。

「つまり話がしたいと言うことね」

「失礼。なんとお呼びすればいいでしょうか？」

「エミリアよ」

宙に浮いた氷が消えて、横にいるフェルトが「何の真似だよ」と脇腹をつくが、「どうせ喧嘩しても勝ち目がないんだろ。私に任せとけ」と頭を撫でた。

エミリアが此方へと歩み寄り、それに合わせるようにナツミも歩く。

そしてその後ろから煙のようにユルい影が彼女へと高速で迫ッ。

「はい、だらあああああ——っ」

ナツミはエミリアを抱き抱えて横に転がった。

瞬間、一振の刃が虚空を切る。間に合ったのは運が良かった。エミリアは何が起きたのかよく分かってないのか目をパチくりとさせている。

「まさか、避けられるなんて」

黒髪黒服の女の到来。

「敵襲だあああ——!!!」

腹の底からナツミは叫んだ。

「なかなかどうして、紙一重のタイミングだったね。助かったよ」
「おお、何だ。ここにきて新キャラか？」

前回の焼き直しをするみたいに棍棒を持ったロム爺が暴れてナツミは酒瓶を投げるタイミングを伺う。

混乱から立ち直ったエミリアが小刻みに氷の礫で女を牽制してくれるのを有り難いと感じつつ、サムズアップする猫の妖精みたいな存在にナツミは敵か味方かと問いかける。

「僕の名前はパック。リアを助けて貰った恩もあるし、今は味方であると思ってくれていいよ。僕、結構強いんだから期待してよね！」
「何か知らんがサンキュー！今は猫の手も借りたいぐらいだ」

これで頭数は四対一。エミリアのお陰で前回よりもロム爺のダメージは少なく、恐らく前回死んだ時間帯はとうに過ぎていく。

猫妖精がどれだけ強いかわからないが、状況は傾いたと思っていだろう。

「ううおりああ!!」

ロム爺の棍棒。エミリアの氷の礫。エミリアよりも若干多いパックの氷の礫。そして最終兵器である自分。

「少しだけ、やりにくいとを感じるわ」

それでも女は余裕綽々といった感じで、目に見えるダメージはない。

「理不尽過ぎんだろお前ッ！」

「ごめんなさいね。この程度の修羅場、飽きるほど通っているの」

三日月の唇から笑い声がする。

殺気を向けられたのか一瞬足がすくんだ。

「出し惜しみしている場合じゃねえな」

「ただ、逆にそれで踏ん切りがついた。」

ロム爺やエミリアがスタミナ切れでぶっ倒れるよりも早くあの女を倒すとなると、ここは自分が動くしかない。

「パック、フェルト、少しいいか？」
「ん？」「何だよ？」

◇

「何かする気ね。楽しみだわ」

「は、そんな顔が出来るのもこれまでだ！」

叫んだせいで女の注意は自分の方に向いてしまいがそれは好都合。

ナツミは覚悟を決め、今回の秘策である物を握り締めた。

「そおおい——！」

グルングルンと振りかぶって、投げられたのは酒瓶ではない。半透明のビニール袋。

ヒラヒラと舞うそれを初めて見たからか、女は不思議そうな顔をすする。そして接触は危険だと思ったのか横に避けた。

「……残念ね。何がしたかったのかは分からないけれど、貴方の秘策は無駄に終わってしまったみたい」

「ふ、そうでもないんだなこれが！」

自信満々に胸を張るナツミ。それが本当か出任せなのか女は判断に迷い、地面に落ちたビニール袋を見る。

「……やはり、何もない。」

だが女が再びナツミの方を見たとき、それは起きた。

『僕に背中を見せるとは随分と余裕だね』

「ツウ!？」

女の背後でパックの音がする。

この中で、あの精霊が一番厄介。だから一番注意を払っていたというのに、いつの間にも後ろに回り込んだのかとククリナイフを投擲する勢いで後ろを振り向いた女。

『残念ハズレでした！』

そこにあっただのは音声を再生する携帯電話。

それはビニール袋を投げた時に、この中で一番足の早くて小柄なフェルトに頼んで女の背後へと忍ばせた物だった。

「……成る程。知恵比べは私の負けね」

本当のパックはエミリアの横から動いていない。次の瞬間、四方に展開したパックの氷が女を包み込んだ。

第一章4 『分からないか？俺もわからない』

「――ふう、何とかなった」

半壊した盗品蔵。氷付けにされた女の氷像を中央に掲げる何とも不気味なインテリアを眺めながら、ナツミは大きく体を伸ばす。

「ふああ。間に合ってたよよかったよ」

「ありがとうパック」

視界の端では、召喚時間が過ぎたのか、それとも単に眠いだけなのか、猫妖精のパックが寝あくびを立ててエミリアの持つ宝石の中へと吸い込まれていく。

「ありがとう！助かったぜ！」

何となくだが、こいつがいなければまた私たちはあの女に殺されていた気がする。

握り拳に親指を立ててグッチョブサインを送るナツミに、パックは「男クサイなくもう少し女の子らしく出来ないの？」と小さく笑いながら消えていった。

「これにて、一件落着！」

……と、言いたい所だけど、フェルト

「分かってるよ。」

買い手がいなくなった以上、こんなもんは只の爆弾と変わらねえ。ほら、今度は盗まれねえようにしろよな」

フェルトが投げた徽章をエミリアは受けとる。

「えつと……こういう場合、私はお礼を言うべきなのかしら？」

元の鞄に収まった。今度こそ一件落着だ。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

それから私たちが襲った女。後に『腸狩り』として異名を持つ危険人物であったことが発覚する彼女はエミリア預かりの元、王都の収容施設へと連行されたが、いつの間にか脱走してしまったらしい。

「折角、盗品蔵の修理が終わったのに物騒じやのう」

「 فقط 流石に王都にはいないだろ」

「だよなくここらに衛兵が足を踏み入れるぐらいだ」

一つのテーブルを囲って頬杖をつく三人。

ナツミ、フェルト、ロム爺はあの女の手配証を眺めながらやる気なしに今後について話し合っていた。

「姉ちゃんはここで働くんだろ？」

「そうだな。まずは文字の練習から初めないと」

元の世界に帰りたいとは思うものの、がむしやらに走っても犬死にするだけだというのは異世界召喚一日目で嫌と言うほど思い知らされた。

ナツミとしてはこの世界に対する理解を深めていくのに暫くは時間を要したいと考えている。その点、盗品の売買はリスクこそあるものの、ロム爺という強力なボディガードに守られる中で色々な物事（裏事情含め）を知ることが出来る。そして住み込みで働ける。身寄りのない自分には渡り舟な話だった。

「そっか」

心なしかフェルトは嬉しそうだ。

これでシュークリーム目当てなら、もう用意出来ないなのでフェルトには申し訳なく思うが、死線を共にした仲だ。そういう物欲しさからではないとナツミの勘が告げる。

なんだが仲良くやっていけそうな気がした。

(さて)

激動の一日を終えて、ゼロから生活基盤を築き上げた。

(こっから、どうなることやら……)

第一章4 『分からないか？俺もわからない』(了)

第二章Ⅰ 『目覚め』

ロム爺の盗品屋で世話になって数週間。

「またのお越しをお待ちしております」

企業スマイルを張り付け、すつかり接客の態度も板についてきた時のこと。

「おう嬢ちゃん。こいつが店ん前で伸びてたんだが、取りあえず手当てを頼めるか」

ロム爺が持ってきたのは帽子にローブと緑一色な幸薄そうな男だった。

第二章Ⅰ 『目覚め』

「あ……れ、ここは？」

「ようやく目が覚めたな」

頭を抑えながらゆっくりと起き上がる男。

ナツミは窓の外を見て、すつかり日の暮れてしまった様に今日1日を潰してしまったと苦笑いしながら、「何があつたのかは知らねえけど、全身痣だらけだ。もう少し寝てろよ」と優しく語りかける。

「あなた、は……？」

「私か？私はこの看板娘！ナツキ・ナツミ。よく名字と名前が似てるもんで覚えやすいと評判、町内一有名な女子高生と言えばアタシのことよ」

オタサーの姫とはよく聴くが、商店街の姫と呼ばれたのは後にも先にも自分だけだろう。

靴屋から肉屋に時計屋まで。客として渡り歩いたばかりかお手伝いと表してバイトさせてもらったことも多くある。金銭のお給料は不景気なので子供の御駄賃並みだったが、よくお店の割引券を貰えたりするの、これがけっこう儲かるのだ。

「ナツミさんですか……」

この度は僕のような得体の知れない者を助けていただき、ありがとうございます」

「別に気にするな。困っている人がいたら自分が不幸を被らない程度に助けるのが気持ちいい生き方つてもんだ」

人助けが偽善というやつはいるが、見て見ぬふりをする方が罪悪感で辛いというやつもいる。流石に私は自己を顧みず他者の為にあれるほど出来た人間ではないが、だからこそ自分が不幸にならない程度には人助けをする。そうあれるように努めている。

「ま、今回はロム爺に頼まれて看病してただけなんだぞな」

暇な間に文字の練習も出来たし、手当ては最低限。ロム爺の性格からして包帯の一枚二枚で金をむしり取るようなこともないだろうし、男が気にするようなことは一つもない。

「今日はもう休め」

「ではお言葉に甘えて」

「あ、そう言えば名前はなんて言うんだ？」

「オットーと。オットー・スーウエン申します」

丁寧に頭を下げるオットーに、この分では衛兵から追われる犯罪者という線も薄いだらうとナツミは納得して、予備の毛布を取り出すと体に巻き付けた。

「じゃ、私は隅っこで寝るから」

「……は？、ええっ!？」

椅子を五つ並べて寝転がるナツミにオットーは動揺する。

「だって、ここ私の部屋だし。他の部屋は掃除してないから嫌だし」

これでも女の子。埃まみれの部屋で寝るのは嫌だ。

そして酒臭くてイビキのでかいジジイと寝るか、気弱そうで起き上がるだけでも呻き声を漏らす重傷人と寝るかでは圧倒的に後者の方がいいに決まっている。

「一応言っとくが、下手な真似をしたら……もぐぜ」

ニヤリと笑うナツミに、又にも手をおいてガードの構えをとるオットー。

「お休み」

「お休み、なさい」

けつきよくオットーがナツミに対して何かすることはなかったの

だが、彼は悶々とした眠れぬ一夜を過ごしたという。

第二章2 『お婿にいけない』

僕、オットー・スーウエンの不幸は今に始まった事ではないですが、最近では輪をかけて酷い気がします。

「……………」

「な、何なんですかあああ！貴方達っ！」

黒い頭巾を被ったナイフを振り回す集団に襲われて、積み荷の大半を失ったり、

「ガルルル!!!」

魔獣の群れに出くわしたり、

「…………ハッ!?ここは?」

目が覚めたら全身が痛くて、土地勘のない場所に放置されていたりと、正直メンタルはボロボロです。

ほんと、行商人が竜車が失うとかシャレになりませんし、新しい物を用意出来るお金もなければ訳あって実家とは絶縁状態。

……正直人生詰んだなと乾いた笑みが漏れました。

成り行きで、綺麗な女ナツミさんの人に看病されることになりましたが、どうせこの後にはこの幸運を打ち消すぐらいの不幸なことが待っているに違いありません。

どうせ酷い目に遭うなら目の前の彼女を襲ってやるぐらいの気概があれば、もう少し人生を楽しんで生きられたのかもしれないですが、どんな状況であれ女性に乱暴を働くなど考えられないことでした。

毛布を深く被った僕は鈍痛に顔を歪めながら「早く朝よこい」と強く念じます。

「むにやむにや…………ちよつとトイレ」

「あれ、いつの間にか寝ていたのか」

オットーが重い目蓋を開けた時に飛び込んできたのは日差しのみり。

横に並べられた椅子の上にナツミさんの姿がないことをみるに普通に熟睡してしまっていたらしい。

「どうでしょうか……」

思えばここが何処だか分からなかった。倒れた自分をナツミさんの知り合いが運び込んで、彼女が面倒を見てくれたのは昨日の話で伝わったが、肝心のここがどのような場所であるか聞いていなかったのだ。

記憶の最後はメイザース領付近の街道を竜車で移動していたので普通に考えればメイザース領の中ということになるが、自分がこんな怪我を負った理由も気になる。

まだ痛む体に鞭を打って立ち上がろうとするオットーは『むにゆり』とした片手の感触、何か変な物でも触ったかと視線を横にして――時が凍りついた。

片手に収まる、ナツミのおっぱい。

「どうして」、だとか「何故」という疑問は浮かばなかった。

むしろ「服越しなのにこんなに柔らかいんだ」とか「この後、死ぬんだろうな僕」みたいな斜め下のことを考えていた。

「む。ふああ〜」

しかし艶めかしい寝息に心臓が跳ね上がる。

この瞬間だけ全身の痛みが吹き飛んでいたと後のオットーは語った。

「あれ、オットー」

ナツミが目を開けたのとほぼ同時。

オットーはバネのように体をくねらせ、そのまま地面へ。

「たいへん申し訳ありませんでした!!!」

気付いた時には地面を見ていた。

そこに至る経緯がなんであれ、女性の胸を触る。それ即ち禁忌であると、ジャンピング土下座をかましていた。

「……………はへ？」

第二章2 『お婿にいけない』

オットーが寝ているベッドにナツミがいたのは、寝ぼけた彼女が誤って侵入してしまったからだと事態は判明した。

ナツミはオットーが胸を揉んでしまったことに対して笑って許してくれたが、それを聞いたフェルトはオットーに白い目を向けた。

「それで、兄ちゃんはどうするんだ？」

ナツミの腕を取ってシャアアと猫のように威嚇して問いかけるフェルト。

罪悪感に苛まれるオットーは「胃が痛い」と嘆きつつも、「申し訳ないですが、ここは何処か伺ってもよろしいでしょうか？」問いかける。

「ここは、ワシの盗品屋じゃ」

「盗品ツ!？」

「おいおい、何ビビってんだよ。スラム街なんだからあつても不思議じゃないだろ」

「スラム街…………？」

盗品屋というワードにたじろいだが、スラム街という言葉に首を傾げる。

オットーの記憶が確かならメイザース領は広くとも、その大半は魔獣の住む大森林に覆われ、小規模の村が一つあっただけの筈。治安が悪いというならそれまでだが、そんな話は聞いたこともない。行商人の伝ではメイザース領の村はよくも悪くも普通の村という話だった。

ここにきてここがメイザース領内ではないのかと気付き始めたオットーは再び尋ねる。

「スラム街と聞けば王都以外に馴染みのない言葉ですが、ここは王都と言うことなのでしょうか？」

「何だ兄ちゃんも気づいたらいた口か」

「僕も？」

「多分、オットーとは別口だと思っけど私も気付いたら王都に居たん

だよ。当初は身寄りもなければお金もないと結構危ない状況だったけど今はロム爺達にお世話になって、帰る方法を模索中」

感触深く激動の一日を振り替えるナツミ。それに大精霊の悪戯にでもあったのかと心配そうに見るオットー。彼は思わず何か手助けになればと声に出そうとして、むしろ今は自分が助けて欲しい状況だったことを思い出す。

(でもメイザース領付近で気を失って、王都のスラム街で目が覚めるってどういうことだ?)

こちらはナツミさんのパターンとは違い、明らかに人為的な何かがか関わっている。何の為にオットーを襲ったのか、身ぐるみを剥いで、そこらに投げ出すというならまだしも、そこそこ離れた王都に連れ込んだのは何の意図があつてのことなのか。

「うくん」

「まあ、直ぐに何をするか決められないよな」

悩むオットーにナツミは立ち上がる。

「そろそろ昼食時だろ?」

今日は私が用意するからフェルトもオットーも食べていけよ」

「マジかっ! だったら、『かれーらいす』が食べてえ!」

「お前、あんなのを気に入ってくれたのはいいけど流石に今からじゃ無理無理。スパイスだつて足りないし、今回は肉とポテトサラダで勘弁してくれ」

『ぼてとさくらだ』ということは姉ちゃん、当然マヨネーズもかけるのか!」

「おうよ。マヨネーズ足し足し奈月家特製ポテトサラダよ!」

「ワシはあんまり好きじゃないんだがのう」

フェルトの嬉しそうな手前、表立って嫌いとはいえないロム爺をチラリと見て、ナツミはロム爺のポテトサラダはマヨネーズ少なめにしとこうと心のメモに書き留める。

オットーは悩み所だが、マヨラーの勘として多分好きな方だ。

フェルトと同じぐらいの量で問題ないだろうとエプロンを巻くと、慣れた手つきで芋の皮剥きを始めた。

「ほふあ……」

まもなく香る鼻腔を擽る良い匂い。

オットーが視線を向けるとナツミは一端の料理人顔負けの手つきでフライパンに火を通して豪快に肉を焼いていく。

実の所、ナツミの料理の腕は地元肉屋や魚屋やらと本番の職人到手取り足取り教わったもので、また本人の飲み込みが良いものだから老婆心を擽られた彼らにあれよこれよと技術を詰め込められ、実は母親である菜月菜穂子の腕をぶつちきりで超越していたりする。

だが菜月菜穂子がまだまだ娘には負けてられないと無駄に凝った料理ばかり作るものだから、本人は単にレパートリーが増えただけだと思っっている。

カレーっぽい何かとはいえ、現地の物でカレーを再現出来たのもその為で、フェルトは将来金持ちになったらナツミを料理人として雇おうと心に決め、ロム爺は盗品屋を辞めて定食屋でも開こうかと考えるほど、今ではガッツリ胃袋を捕まれていた。

「ほら、お待ちどうー！」

ご丁寧に見栄えまできつちりとしえ整えられたそれ。

ごくりと喉を鳴らしたオットーが恐る恐る口に運んで――、

「結婚しましょう」

溢れんばかりの幸せが脳内を埋め尽くした。

子供が三人。大きな家。毎日ナツミのご飯を明るい家庭で食べる自分まで妄想して、フェルトのドロップキックに気を失うことになる。

第二章3 『リング飴』

「…鼻がまだ痛みます」

夕食の席、赤くなった鼻先を抑えてナツミ特製親子丼にスプーンを通すオットーはそう言った。

大きな肉の塊にかぶり付きながら、フェルトはそれに顔をしかめて、

「自業自得だな。むしろその程度で済ましてやったのを感謝して欲しいぐらいだぜ」

「だからって、顔を蹴ることないですか…」

「いきなり胸を揉んで求婚するような変態が何を言いやがる」

「それは…、そうですけど」

罰の悪そうな顔をして伏し目がちにキッチンにつくナツミを覗き見るオットーは盛大にため息を溢す。

彼女の言う通り、この盗品屋に来てからの自分の行いは変態のそれだった。今までろくに女性と関わることなどなかったのに、不注意とはいえ胸を触り、更には美味しい料理に感激して求婚までしてしまうなんて…。

「ハア……」

肩を落とすオットーに、デザートであるリングを丸かじりするロム爺は、

「なんじゃ、一度フラれたぐらいで沁みつたれくさいのお。そんな未練タラタラなら、なんぼでもコクればいいじゃろがい」

「そ、そんな！節だらな気持ちなんて僕にはありませんよ！それにまだフラれた訳じゃ…」

「ちなみにだが、姉ちゃんの好みは金持ちでイケメンで、背が高くて強い、そして面白いやつだ。今の兄ちゃんとは似ても似つかないな」

ナヨナヨとするオットーをフェルトは皮肉げに笑う。

現状、この屋敷で最もヒエラルキーの低いオットーはこのように言われたい放題である。ナツミに嫌われてないことがせめてもの救いだ、特にフェルトには何故か目の敵にされていて的確に自身の心を

扶ってくる。

だから早く怪我を治してここから出て行かなければと親子丼を掻き込むのだが、

「(っ)ほ(っ)ほッ」

「あー、あらら」

ついむせてしまい、その背中を駆けつけたナツミが優しくさすってくれた。

「おいフェルト、こいつメンタル弱いんだからそんなに苛めてやるなつて」

「ハ、どうだか。姉ちゃんもそんなやつに構うことないんだぜ」

わざとやっているんじゃないかなという冷えた視線をオットーに向ける。

「苛める趣味なんてねえよ、これでも人助けは好きでやってんだ」

オットーはそんなナツミの優しく労ってくれる気遣いが嬉しくもあり、男として情けなく感じる。

こんなに手厚い接待を受けたのは生まれて初めてだ。

オットーはいつか必ずナツミへの恩を返すと心に誓いながら「ありがとうございます」と起き上がった。

「そう言えば、明日城の方でつかいイベントがあるらしいんだけど、ロム爺。休み貰っていいか？」

人がいれば元に帰る手段もそれだけ探りやすくなるだろうし、仲良くなつたリング売りのおっさんにリング飴の作り方を教える約束してんだ」

「まあ1日ぐらいなら問題あるまい」

「しやー」

拳を握り締めて喜びを露にするナツミ。高校生にもなつて、いや青春真っ只中の高校生だからこそ、やはりお祭りというのは見過ごせない。

明日は思いっきり楽しんでやる。そう…何だが落ち着かなそうに視線を動かすフェルトを横に見て、

「もちろん、フェルトも行くよな！」

「え…、ああ当たり前だろ！」

虚を突かれたような顔から、分かりやすい笑顔。

妹がいたらこんな気持ちなのかと思わず頭を撫でてしまう。

「うわ、うう…」

「そういや、オットーはどうする？」

まだ痛むようなら安静にしとくのをオススメするけど」

「そうですね…、お邪魔でなければ…」

正直歩くだけでも辛い、無理をして気になる女性のお誘いを受けようとするオットーを、

「チツ」

(舌打ちされた!?)

フェルトは舌を叩いて睨みつけた。

第二章3 『リングガ飴』

そして翌日。軽い荷物を背負ったナツミはフェルトとオットーを連れて王都の街道を歩いていた。

「じゃ、私はリングガ売りの手伝いで昼まで掛かるから」

盗品を売って生計を立てるフェルトは兎も角として、無一文であるオットーにナツミは少しばかりの小銭を握らせる。

「ちよ、悪いですよ!？」

「誘ったのはこっちなんだし気にすんな。それで適当に時間潰してこいよ」

オットーはあからさまに遠慮するが、ナツミが渡した金額は盗品屋のお給料分から考えればそこまで痛手ではない。

適当に言いくるめてオットー達と別れたナツミは、早速リングガ屋につくと、おっさんからいくつかリングガを貰い、リングガ飴作りに取り掛かる。

ガスコンロがないので砂糖を溶かすには少し戸惑ったが、何とかそれなりの出来に仕上げ、あとは売り子として太陽が中央に浮かぶ

昼まで手伝うこととなった。

「ほお、リングガを飴でコーティングしたのか」

「お、一目で見抜くとは御目が高い。騎士様もお一つ以下かですか？」
今回のイベントも関係しているのだろうか、やはり私の可愛さとり
ンガ飴の物珍しさが注目を引いたのか、売上は、上々。

しかし日に、十人も来ることもない盗品屋での接客業に慣れていたせ
いか、リングガ飴作りに接客と多忙な仕事にバテ始めていたナツミは、
ふと興味を得たように立ち止まった青髪の青年にリングガ飴を勧めて
みた。

「ふむ、では一つ……いや、五つほど頂けるだろうか？」

「毎度ありー」

仲間か同僚にでもあげるともりなのだろうか。串に刺さった五つ
のリングガを器用に片手だけで掴み取った青年は人混みの中へと消え
ていく。

「そろそろ飴の在庫が切れるな」

こんな評判だと事前に知っていれば、もっと用意してきたのだが
まさかの完売である。

「おっさん、もうそろそろ上がるぜ」

時間に見れば丁度良かった。

事前に約束した通り、リングガ飴の売上の三割を貰い受けたナツミは
意気揚々と街へと繰り出した。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「あー、ここでリングゴ飴が売ってるって聞いたんだが……え？ 売り切れ
ちまったのか!?!……やべえ、姫さんにどやされるぞコレ」

その数分後、頭部だけフルフェイス型の鎧を纏う奇妙な男がリングガ
屋を訪れたのだが、ナツミとはすれ違ってしまった。

第二章4 『放蕩貴族』

王都の道にはまだ不慣れな所が多いとはいえ、知っている道をただ逆走するだけで迷子になるわけがない……と、思い込んでいた数刻前の自分を呪いたい。

「ここ、どこだよ……？」

ナツミは頭を抱えて立ち尽くしていた。

いつの間に紛れ込んだのか人並みの喧騒から離れた狭い路地。

異世界転移は路地裏からのスタートだったが、少なくともあの場所とはまた違った場所であり、今度はあの三馬鹿のような不良の姿すら見当たらない。

「コミ力に定評あるナツミちゃんでも、流石に誰もいない状況となつては、どうしようもないんだがこれが」

老人だつて、赤ん坊だつて、しまいには犬猫とだつて仲良くなれる自信のあるナツミだが、今回はその個性も役に立ちそうになかった。

ならば大人しく来た道を引き返そうにも、パン屑を落としてきた訳でもあるまいし……いや、パン屑だと鳥や鼠に食べられてどのみち意味がないのだが、入り組んだ道のせいで、もう自分が右か左から来たのかも分からない。

正真正銘、迷子である。

「あー、本気で不味いぞ。フェルト達も待つてるだろうし、二回目の死因が迷子の末の餓死とか目も当てられねえ」

死に戻りに何か特別な条件があれば話は別だが、このままでは本当にやり直すことになるのではないかとナツミは震える。

「死にたくねえよ。こんな馬鹿みたいなことだ！」

最悪これでリング屋から再ターゲットならまだいいが、またエルザと戦う羽目になるなら、それは死んだ目をして生きるのを諦めるレベルだ。

せいぜいオートセーブであることを願いつつ、ナツミはせめて人通りのある場所に行こうと歩き出した。

「そこをちよと待ってくれるかあくな」
「どひえ!？」

だからその肩を優しく叩かれたのは完全に不意打ちであり、乙女らしからぬ悲鳴を上げてしまったのも無理はない。

「実は道に迷っていてねえ。宜しければ貴族街までの道を教えてくれないかあな?」

「背高!?!ピエロ!?!貴族街!?!つうかお前も迷子かよ!初登場のクセして設定盛り過ぎじゃねえかテメエ!？」

「ん?成る程、どうやら君も迷子のようだねえ」

長身のピエロメイクをした見知らぬ男性。見た目こそ奇抜だが、第一村人発見という本来なら舞い上がる状況も同じ迷子であるという言葉に落胆に沈む。

「ここは白馬の王子様が助けしてくれる流れじゃねえのかよ……」

「どうやら、ガツカリさせてしまったよーうだね」

「そうくだね、ナツミちゃんがつくりだよ」

「おや、自己紹介かあい?」

ならば私も一応名乗っておこうか。私はロズ……そうだね、気軽に『ロズつち』と呼んでくれたまーえ」

能天気そうにロズつちと名乗るその男。

この時彼がロズワールと名乗っていれば、ナツミはエミリアとの出会いやオットーの話から知り得た情報で、ひもづる式に彼がロズワール・L・メイザース辺境伯であることに行き着いたのだろう。

(愛称、それとも偽名か?……おいおい、実はやんごとなき身分のお方でした、とか止めてくれよ)

だが、ロズワールがここで真名をボヤかしてしまったので残念ながら気付くことはなく、”一難去ってないのにまた一難”という現状に胃が痛くなる思いだった。

第二章5 『見捨てられたモノ』

「時にナツミ君。君はなあんでそんな変わった喋り方なのかあな？」
「……ロズっちがそれを聞いちやうのかよ？」

自分の喋り方は確かに男のようだが、それが変かと問われれば独特の言い回しで話すロズっちとて、百人中百人が変だと答えるだろう。

「私のこれはわざとやっているんだあよ」

「わざとってアンタ。キャラ付けならもつとマイルドなのにしとけばいいでしょうに」

「いやいやく逆にこれぐらいぶっ飛んでいた方が顔も覚えられやすいのだよ。何せ我が一族は代々この口調で通しているお陰か「あの鼻につく喋り方はヤツの跡取りか！」なんて私の場合は自己紹介を済ませる前から相手側が理解してくれた物だあ」

（いや…鼻につく喋り方って、単にうざがられてるだけじゃねえか）

この世界の貴族がどういった組織形態を築いているか分からないが、少なくともロズっちの言動を不快に感じるほど真面な感性をしていることを素直に喜ぶべきだろうか。

「うん？」

「……まあいいや」

貴族社会では完全に浮いているようだが、こういう喋り方に個性を見出だすのもこの世界じゃ案外普通の事なのかもしれない。郷に入れば郷に従えとは言うし、相手方の文化を知らないのに下手に突っ込んで、それが無礼になつては目も当てられない。

「私のこれは一応素だな。矯正しようと思えば出来なくもないんだが、今はする意味もないしな」

こんな口調になったのは、あの無駄にキャラの濃い親父と一緒にいたのが影響したんだろう。あっちでは外顔を考えて丁寧口調とオンオフ切り替えるようにしていたけど、こっちでは知り合いも居ないし今の今まで下手に気を使う必要もなかったんで、ずっとオフだった。

「ロズっちが気になるなら変えよ……ましようか？」

「んイヤあ、そのままです結構さ」

どうやら興味本位で聞いただけなのか、納得がいったと僅かに微笑んだロズつちは、ふと私を先導するかのように前を歩き始めた。

「おいおい。そんなにペースを早めても」

印を付けた訳ではないので不確かだが、私達はどうにも同じ場所をグルグル回っているように受ける。それはこの規則性のない建物の乱列のせいなのか、スタンド幽波紋攻撃を受けている!?!…なんて魔法的な物のせいなのかは分からないが、イタズラに体力を消費しては、それこそ餓死ルートに一直線だ。

「ここは落ち着いてだな。壁に手をつけながら歩くとどんな迷宮でも突破出来るという話を……」

「おや？ 彼処に誰かいるようだあね」

「おお……おお」

ロズつちの指差す方に視線を動かすと、そこには頬のコケた痩せ気味の青年がいた。今度こそ第一村人発見か!?!と一瞬上がったテンションだがその男が握りしめる凶器ナイフを見ると急落下し、一步、二歩と足を引いてしまう。

「殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる……」

それに対して男は立ち上がり、此方を見るが目の焦点は合っており、息も荒く、そして口からはだらしなく唾液を滴らせていた。

（駄目だ。奴さん正気じゃねえ）

先ず会話になどならないだろう。ナツミは直ぐに逃げるべきだと判断して足腰に力を入れる。これが少し前なら恐怖に固まっていたのだろうが、一度死んだお陰か、ある程度恐怖に耐性がついたみたいだ。

（大丈夫だ。この距離なら逃げられる）

こういう時こそ冷静になれと自分に語りかける。男は見るからに万全な状態とは言えない。足元は覚束ず目の隈も酷い。やはり男と女ということで体力差には若干不安が残るが、曲がり角を利用すれば……だ。

（これで一番嫌なのがエミリアみたいな魔法使いだっというパターン

第二章 6 『再会の精霊使い』

色の三原色に『赤青黄』と言うものがあるが、地毛でそのような髪の色を持つ人間はまずいない。

赤毛だったり黄色は金髪があるので正直グレーな所だが、単色の赤や青といった髪色なんてアニメや漫画でしか見たことがなかった。

「あら、目覚めましたわ、姉様」

「そうね、目覚めたわね、レム」

さて、袋小路でヤバめの男に襲われた現役女子高校生ことナツキ・ナツミちゃんは黒い霧のような物に覆われたと思った瞬間、意識が途切れる感覚があったのだが……目が覚めると桃と水色の髪色をしたメイドさんが二人（瓜二つの容姿からして双子？）に見下げているのはいったいどういう状況だろうか？

加えて羽毛なのかフワフワだけど、どこか頼りない枕。同じ木製でも盗品屋とは比べ物にならないぐらい上等な壁。そしてシャンデリア的な照明ときたら、高級スイートホテルにでも来たような気分だ。仮にここが天国だとすれば話は別だが、『死に戻り』したという線は薄いだろう。

「……えつと、ここはどこだ？」

「ロズワール様の別荘ですよ、お客様」

「ロズワール様の別荘よ、お客様」

取り敢えずここが死後の世界であるという選択肢が消えて「ほっ」と息をつく。

「何で私はここに？」

「それは路地裏で気を失ったお客様を、ロズワール様が介抱するためにお連れになったからです」

「それは不埒な輩に乱暴されそうになっていたお客様を、ロズワール様が華麗にお助けなされたからよ」

ふむふむ。会ったことはないがそのロズワールとやらは我先にと逃げ出したロズつちとは違って随分と人格者らしい。

メイドに別荘とくれば、貴族か良いとこの商人か。

まだ情報が少ないが、道端で倒れていた見ず知らずの他人にこんな上等な部屋とメイドを宛がってくれる時点でナツミちゃんメーターは斜め上に急上昇だ。

「そっか……ありがとうな。その出来ればロズワールさまにも是非感謝の言葉を伝えたいんだが、そこんどこどう？」

さん付けで呼ぼうとしたら途端に桃髪メイドの方の目付きが鋭くなり、慌てて様付けに呼び変える。

もしかして、さん付けが許されないほどやんごとなきお身分の方だったのだろうか。

…そう言えば何処かで聞き覚えがある気がする。

もしそうだった時の為に本人の前では普段の口調で話さないようにとナツミは胸の内に深く刻み込んだ。

「それには及ばないわ、お客様。ロズワール様は公務で留守になされているから、元気になったら尻を蹴って放り出せとのことだもの」

「それには及びませんわ、お客様。ロズワール様は公務で留守になられているので、感謝の言葉なら後日改めて受けとるとのお達しです」

「うくん、二人の言ってることが天の邪鬼過ぎてどっちを信じていいのか分からねえな、これは。個人的には他人行儀の中にうつつすらと優しさの伺える妹様の方を信じたい所ではあるが……」

ふとナツミは何かを思い出したかのように自らの身体をまさぐる。

「外傷なし、衣服の乱れなし、イカ臭くもなければ、股の間に異物感もなし、と」

「…心配しなくてもお客様の身体は綺麗なままよ」

「泥や煤などで多少汚れていましたが……その、乱暴されたような様子はありませんでした」

私の運び込まれた状況と今の動作で察したのか、求めている答えを教えてください。

あの状況では流石にダメかと思ったが、どうやら紙一重でナツミちゃんの貞操は守られたらしい。

「これはロズワール様とやらがヤバめの男から庇ってくれたパターン？もしかしてロズワール様が運命の王子様だったり……」

「どうやらお客様は頭がおかしいみたいね、つまみ出さない、レム」
「はい姉様。どうやらお客様はお元気そうなので、レムが御自宅まで送り届けたいと思います」

「……うむ、飴の妹と鞭の姉とでも言うべき完璧な配役」

この双子メイドの主人であるロズワール様が狙ってこれをやっているならかなり出来るやつ。メイド服のデザインも中々だし、もしかしたら趣味が合うかもしれない。

ただメイドのロリレベルが少し高めなので、そこが注意点か。

「ん？」

寝ている間に着替えさせられたのかネグリジエみたいな服装から慣れ親しんだジャージへと着替えたナツミは御礼すべきロズワールも留守にしていることだし、何より残してきたフェルト達のが気になるので、妹様の案内のもと盗品屋に帰ろうと思いつつ。

その目の前の扉がコンコンと叩かれ徐に開かれた。

「あら、もう帰るの？」

出会いは行き違い、再会は死。

今回は藤色のランピースというラフな格好をした彼女。

「あんたは……」

良い意味でも悪い意味でも今後一生忘れられる予定のない銀の髪の少女——エミリアが小首を傾げて此方を見つめていた。

第二章7 『王選』

「……エミ、リア」

「よかった。名前、まだ覚えていてくれたのね」

そりや半日にも満たぬとは言え、あり得ないぐらい濃密な時間を共にした仲だ。

警官と間違えたり、初めて瞳を交わした時は文字通り死んだ目をしていたり、殺人鬼と協力して戦う事になったりと、逆に忘れられるようなやつがいたら教えて欲しいぐらいである。

「私ね、昨日王都に来たの。久しぶりに貴方達に会いに行こうかと考えていたんだけど、まさかロズワールにお姫様抱っこされて来るなんて、とつてもビックリしたんだから」

「君の傷はリアが治してあげたんだよ。治療術はロズワールも使えるんだけど……ほら、全部治ったかどうか、嫁入り前の娘の衣服をひんむいて一々確認するのもどうだろうって話になってね」

「おお、エミリアにも世話になってたのか。そりあ迷惑をかけた。ありがとな」

あの黒いモヤに包まれて意識を失った時、かなり勢いをつけて転んだ筈なのに擦り傷一つなかったのは彼女のお陰か。

ひよっこりとエミリアの肩から顔を出した猫精霊の言葉を聞いて素直に感謝の言葉を告げる。

「ふふ、女の子だもの。大したことのない傷でも痕になったら大変でしょ」

「うんうん……傷痕は男にとつちや勲章だが女には言葉一つでは語れないほど大変なことよ」

女が体に傷を残すこと。

昔はその重大性がよく分かっておらず、男子連中と夜更けまで遊んでは傷だらけで家に帰って、マイマザーが烈火のように怒るのだからよく号泣した物だ。

が、流石に今なら理解出来る。

「この国では知らねえけど、俺の国で女の顔に傷って言ったたらよく定番なのが許嫁問題だな。身分は決して高いとは言えず性格は最悪な悪役令嬢様が第一王子に取り入る……なんてパターンは最早擦り過ぎて寒いぐらいだぜ」

「ふふ、ナツミは面白い話をいっぱい知ってるのね」

「おうよ」

何せこちとら暇さえあればゲームや漫画三昧のニート様だ。バイトはしていたがやはり学校に通わない分、空いた時間はあるわけで、市販で手に入る乙女ゲーは粗方網羅したと胸を張って言える。

「でも女の子があんな所を一人で歩き回るなんて、大変。ほんとうに危ない事なんだから」

「ああいった場所は下手なごろつきでも出歩かないからね。大抵は日陰者の犯罪者の隠れ蓑だったり真つ黒な取引現場に利用されたりするから……ロズワールが偶然通りかかったのは運が良かったよ」

「おいおい仮にもこの国の首都だろ……物騒だな」

「ま、こんなご時世だし仕方ないさ。その為の王選でもあるんだし」
チロリと舌を出してエミリアの方を見るパツク。

現在この国は君主制であるにも関わらず、王族が皆、流行り病で亡くなっているという大変な状況なのだそうだ。

それで竜の盟約とやらの従い、新しい王さまを決める為の王選とやらが始まったらしい。

そういやその王選の候補者の一人に上がっているのがエミリアなんだっけか。

「ええつと帰る途中だったのに呼び止めてごめんね。良かったら私が送って行きましょうか?」

「おお、そいつはいいな」

エミリアは私だけでなくフェルト達にも会いにきたと言っていたし何かと都合が良い。

「いえ、残念ですがエミリア様はこれから用事がありますので、その任はレムがお預りいたします」

「ええつ?何かあったかしら?……あ!」

まさにハツとなったと言う言葉が相応しいリアクションを取るエミリア。

「ごめんなさい！私ったらすっかりこっぴどり忘れてた！」

「竜車のご用意は既に済んでおられますので、こちらに」

「そう言う訳でごめんなさいナツミ！この埋め合わせはちゃんとするかー！」

らー、らー、らー……と嵐のように過ぎ去っていく。

「何て言うか、あれだな。めっちゃ忙しいそう」

王選候補者だからだろうか。

改めて彼女とは済む世界が違うことを感じさせられた。

「では、こちらの竜車にお乗り下さい」

「お、これ一回乗ってみたかったんだよなあ」

俺のもといいた時代では馬車として使われていたであろう荷車を引くトカゲのような生き物。

気性は穏やかだということでも軽く撫でさせて貰ったが、意外にも温かく、これは冬は湯たんぽ替わりになるなと思った。

「それに竜って名前だけあって速えなおい」

「顔を出さないでくださいね。それで落ちて首の骨を折った事件もないわけではないので」

「おうよ。運転中はシートベルトを付けて窓の外に手や頭を出さない。これで私が男だったら半身飛び出して雄叫びをあげているところだが、そういう時期は小学生でちゃんと卒業してっから」

「……そういう時期があるにはあったんですね」

淑女であるこのナツミ様がそんな品のないことを今さらするわけもなく、大人しく座って揺られることにした。

「そう言えば、君の名前は姉様がレムって言うってたからレムなんだろうけど、もしかして姉様の名前はルムだったりする？」

「いえ、姉様の名前は『ラム』と申します」

「おお、てっことは実は五つ子で末っ子の名前がロムだったり……」

「私たちは双子ですね」

「だよなー！うわー焦った。ロム爺があんたら弟だったら流石の私

もついでいけねえよ！」

雑談を挟むこと10分ぐらいだろうか。

ようやく見慣れた場所まで出て、そこで下ろしてもらうことになった。

「じゃあ、後日改めてお礼には行かせてもらおうから」

「はい。ではお気をつけて」

レムは家まで送ってくれると行ったがスラム街にこんな物々しいお貴族様の竜車で向かうわけにも行かない。

少し距離はあるが、まあ日が沈む前には間に合うだろう。さて、アイツらも心配しているだろうし、今日の晩飯はスゴいの作ってやらねばと盗品屋に向かうと………更地になっていた。

「ふおわい？」

スラム街の人たちに聞いたたら、スゴい爆発音がして気づいたらこうなってたらしい。

あとフェルトが拐われたとかで、ロム爺が王都に向かったんだとか。

「は………はあああああああ!!!?」

エミリアとの再会は物語の冒頭的なやつだったのだろう。

どうやら平和パートは終わり、私の異世界生活は次の章に進んだよ
うだ。